

下野朝臣古麻呂、文武天皇の山陵司となる。(707〈慶雲4〉年10月3日)

今から遡ること、1300年前の藤原京で、一人の若き天皇が短い生涯を終えました。文武(もんむ)天皇です。わずか15歳で即位した天皇は、在位期間中に大宝律令の制定・施行にあたるなど、改革に尽力しました。この文武天皇と上三川町と一見関係がないように見えますが、ある人物、それは標題にある下野朝臣古麻呂(しもつけのあそんこまろ)という人物を通じて、つながっています。

下野朝臣古麻呂は、その名前の通り、下野つまり栃木でも河内郡を拠点とする豪族です。生まれ等に関する詳しい資料はありませんが、地方豪族でありながら、早くから中央で活躍しました。このことは名前を見ると一目瞭然で、中央貴族しかもらえない「朝臣」の姓(かばね)を684年に朝廷より授かり、藤原氏などといった中央貴族と遜色のない位置づけをもっています。



上神主・茂原官衙遺跡と下野朝臣古麻呂は密接な関連が考えられます

した。

古麻呂は文武天皇のもとで重用され、700年に刑部親王や藤原不比等らとともに律令の作成を命ぜられ、翌701年に有名な古代の基本法である大宝律令を完成させました。その後、古麻呂は律令制定の功績によって、705年に軍事を行なう兵部(ひょうぶ)省長官になるなど活躍をしました。そして707年に文武天皇が若くして亡くなると、10月3日に有力貴族とともにそのお墓をつくるための山陵司(さんりょうし)に任ぜられたのでした。その後も古麻呂は朝廷で活躍を続け、708年に人事をつかさどる式部(しきぶ)省の長官になると、官位も正四位下(しょうしいげ)に昇進しましたが、709年12月に生涯を閉じました。

実は、中央で古麻呂が華々しい活躍をした7世紀から8世紀にかけての大規模な遺跡が河内郡内でいくつかあり関係が考えられています。当時の東国仏教の拠点として戒壇院(かいだんいん)が置かれた南河内町の下野薬師寺、そして、上三川町上神主に所在

する河内郡を治めるための役所と考えられる上神主・茂原官衙遺跡など、全国的にみても非常に貴重な遺跡が所在しています。これらの遺跡から、下野朝臣古麻呂が当時もっていた大きな政治力を窺い知る事ができます。

た報俳句

新涼や快気祝にペダル漕ぐ 浜野正男

遅れ来て小さく使ふ秋扇 大八木喜重郎

満月やお伽の国が展げ来ぬ 柳田石村

提灯を同乗させて魂送り 伊沢静香

雑談の名手も居たり秋日待 蓬田四方

鉢植えの秋茄子紺の色増せり 濱野マス子

孫の耳綿棒使ふ良夜かな 阿部信子

酷暑中待つ踏切の長き貨車 野沢花枝

ちびっ子の相撲に乗り出す爺やかな 上野キミエ

此れよりはみちのくとあり蕎麦の花 石崎節子

